

中学校 英語科 部会

部会長名 添田町立添田中学校 校長 井上 修一
実践者名 糸田町立糸田中学校 教諭 辻 明歩

1 研究主題

自己表現力を高める英語科学習指導

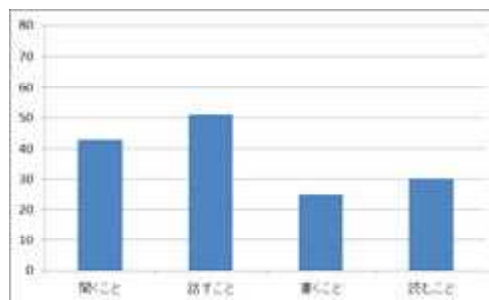
2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

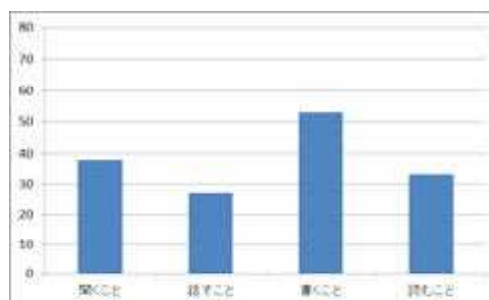
2年後に東京オリンピックを控え、私たちに求められる英語の能力は著しく変化してきた。今、求められているのは自己の思いや考えを自分の言葉で発信できる力である。しかし、中学校での英語教育の実態としては、自己表現活動が活発に行われているとは言い難い。文法指導や、単語指導といった知識の詰め込みに重きを置いた英語の学習指導が中心となってしまっている現状がある。アクティブ・ラーニングが推奨されている現代社会の背景があるにも関わらず、現場の学習指導は、教員の指導力不足と高校入試の対策に追われているため、知識の詰め込みの授業に偏ってしまっている。そんな現状の中で、突然自己表現活動を取り入れても生徒は戸惑い、活動に萎縮してしまう傾向にある。私自身、大学で英語を専攻して以来自分のコミュニケーション能力の低さにかかなり悩んできた。だから、授業ではなるべく生徒が主体的に取り組むことのできる活動を取り入れるようにしてきたが、そこに課題が大きいことも否めない。そこで、自己の思いや考えを英語で堂々と発信できる生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

(2) 生徒の実態から

在籍校で第2学年2組25名に対して実施した「英語科アンケート」で4技能についていくつかの質問をした。(回答はすべて複数回答可)「あなたが英語の技能(活動)の中で一番身につけたいものは何ですか?」の質問に対して、「話すこと」が51%で一番多く、「書くこと」が25%で一番少なかった。このことから、4技能の中で「書くこと」について身につける意欲が一番低いことがわかる。(図1)次に、「英語の技能(活動)の中で苦手だと思うことは何ですか?」の質問に対して、「書くこと」が53%で一番多く、「話すこと」が27%で一番少なかった。このことから、4技能の中で「書くこと」について多くの生徒が苦手意識をもっていることがわかる。(図2)最後に、「英語の技能(活動)の中で必要だと思うものは何ですか?」の質

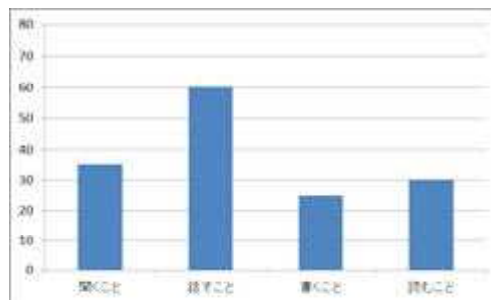


【図1 英語の技能で身につけたい力】



【図2 英語の技能の中で、一番苦手な分野】

問に対して、「話すこと」が60%で一番多く、「書くこと」が25%で一番少なかった。このことから、4技能の中で「書くこと」に対する必要感を感じていないことが多いことがわかる。(図3)



【図3 英語の技能の中で大切だと思う力】

これらのアンケート結果から、生徒たちは、「書くこと」について、身につけたいとか必要であるという意識が薄く、逆に苦手意識をもっている生徒が多いことがわかる。これは、

英単語の定着している語彙が少ないことや英作文をすること自体に慣れていないと考えられる。また、英語の文章に慣れていないため、運用する言語材料が少ないため、多くの英文に触れる機会をつくることも必要である。

さらに、生徒の中には書くことへの抵抗感がある理由として、「自分の思いを伝える」より先に「間違っはいけない」と知識に執着する部分が見受けられる。高校入試という自分の進路を決するために、知識を計るテストがある以上、文法的な間違いを気にかける気持ちを完全に拭き去ることは難しいと考えられる。

これらのことから、英単語の語彙を増やし、英作文をすることに慣れることを前提として、英文を読むことで運用する言語事項を増やしたり、英作文する意欲を高めたりすることで、自己の思いや考えを英語で適切に書くことができる力を高めていくことが必要だと考え、本主題を設定した。

3 主題の意味

(1) 「自己表現力」とは

「自己表現力」とは、既習の英単語や文法事項を組み合わせて、自己の思いや考えを適切に書くことができることである。

(2) 「自己表現力を高める」とは

「自己表現力を高める」とは、授業と家庭学習を連動させた活動を通して英単語の語彙を増やしたり、英作文をすることに慣れたりする「英作文のための基礎スキルの定着」を基盤とし、単元または単元のまとめにおいて、「英作文への意欲化」を図る読む活動から「自己の思いや考えを英作文する力」をつける書く活動に連動した流れを繰り返すことで、自己の思いや考えを英語で適切に書くことができる力を高めていくものである。

4 研究の目標

第2学年の英語科学習において、生徒の自己表現力を高めるために、基盤づくりの活動をもとに読む活動と書く活動を連動させた単元の工夫の在り方を究明する。

5 研究の仮説

家庭学習と日頃の授業を連動させた基盤づくりの活動を行うことで、英作文のための基礎的スキルの定着が図られるとともに、そのことを基に、第2学年の「夢の学校

のきまりを作ろう (NEW HORIZON 2 English Course Unit4)」の単元の指導において、読む活動と書く活動を連動させた単元の工夫として以下のことを行えば、英作文への意欲や自己の思いや考えを英作文する力が高まり、生徒の自己表現力を高めることができるであろう。

読む活動 : ① 読む資料の内容や提示の工夫 ② 読ませ方の工夫

書く活動 : ① 「マイオピニオンシート」の工夫
② 書いたものを表現する活動の工夫

6 研究の計画

(1) 単元 「夢の学校のきまりを作ろう (NEW HORIZON 2 English Course Unit4)」

(2) 単元の目標及び指導計画

単元	総時数	12時間	時期	11月			
単元の目標	<p>○have toや助動詞の用法や文構造について積極的に調べ、活用しようとしている。 (コミュニケーションに関する関心・意欲・態度)</p> <p>○have toや助動詞の語法を理解して、まとまった文章の中から必要な情報を抜き出すことができる。(外国語理解の能力)</p> <p>○have to や助動詞を活用して自分なりの理想の学校のきまりを作り、わかりやすくプレゼンテーションすることができる。(外国語表現の能力)</p> <p>○have to や助動詞の語法を理解して文を作ることができる。 (言語や文化についての知識・理解)</p>						
次	時数	学習活動・内容	評価規準				
			関心・意欲・態度	理解	表現		知識・理解
一次	1	夢の学校プロジェクトの広告を配布し、学習に対する必然性をもたせた上で、have to やdon't have toの用法と文構造について考える。	have to やdon't have to の用法や文構造について積極的に調べている。				ワークシート
	1	have to やdon't have toを用いた文章の内容を理解する。		have to やdon't have toを用いた文章を読み、内容に関する質問に正しく解答できる。		have to やdon't have to を用いた文の用法や文構造を正確に理解している。	ワークシート

二次	1	助動詞will用いた文の用法や文構造を理解する。	積極的に助動詞willについて調べ、文構造を理解しようとしている。		助動詞willを用いて、未来の予定を表す英作文を行うことができる。	確認テスト ワークシート
	1	助動詞willを用いて書かれた文章を読んで内容を理解する。		助動詞willを含む文章を読み、内容に関する質問に正しく解答できる。		Part1,2で学習した語句を正しく理解し、活用できる。
三次	1	助動詞mustを用いた文の用法や文構造を理解する。	積極的に助動詞mustについて調べ、文構造を理解しようとしている。		助動詞mustを用いて、学校のきまりを英語で書くことができる。	確認テスト
	1	助動詞mustを用いた、文章を読み、内容を理解することができる。		助動詞mustを含む文章を読み、内容に関する質問に正しく解答することができる。		Part3で学習した語句を正しく理解し、活用できる。
四次	1	助動詞mustの否定文の用法や文構造を理解する。	助動詞mustの否定文の用法や文構造について積極的に調べ、理解しようとしている。		助動詞mustの否定文を用いて、学校のきまりを英語で書くことができる。	ワークシート
	1	助動詞mustの否定文を用いた、文章を読み、内容を理解することができる。		助動詞mustの否定文を含む文章を読み、内容に関する質		Part4で学習した語句を正しく理解し、活用できる。

				問に正しく 解答するこ とができる。		
五 次	1	Unit4で学習した 文法と既習の文 法事項を活用し て夢の学校計画 を立てる。	夢の学校計 画を立てる ために、積 極的に要項 を読もうと している。	英語で書か れた要項を 読み、企画 の条件を理 解できる。		ワークシート
	1	Unit4で学習した 文法と既習の文 法事項を活用し て夢の学校計画 を立てる。	条件に沿っ て、夢の学 校計画を意 欲的に作る うとしている。		既習の文法 を適切に活 用し、夢の 学校に使用 される学校 のきまりを 作成するこ とができる。	ワークシート
	1	Unit4で学習した 文法と既習の文 法事項を活用し て夢の学校計画 を立てる。	自分たちの 学校計画の 魅力を聞いて いる人に わかるよう に伝えよう としている。		自分たちで 作った夢の 学校計画を 魅力的に発 表すること ができる。	様相観察

7 指導の実際

本時 平成28年11月8日火曜日 第2校時 (第五次) ICT教室③に於いて

(1) 主眼

- 既習の文法事項を活用した書く活動を通して、夢の学校づくりの募集要項に記載されている条件を満たした夢の学校のきまりを作成する。

(2) 授業仮説

夢の学校のきまりを作るという手だてをとれば、生徒はhave toや助動詞を使うことの必要感をもつだろう。また、夢の学校のきまりを作るための条件としてhave toや助動詞が使われた文を多く読むことによって、生徒はそれらの文法の語法やどのような時に活用されるかという規則性に気付き、条件を理解した上で適切な文法事項を活用することで学校のきまりについての文章を構成することができるだろう。そして、夢の学校のきまりを作成できたことを賞賛することで、have toや助動詞を正しく使い分けて表現することの価値を感じるができるだろう。

(3) 準備

ワークシート、夢の学校プロジェクトの広告、夢の学校プロジェクトの応募要項

(4) 展開

	学習活動・内容	指導上の留意点 ◇評価規準(方法)	配時
導 入	1 warm-up (あいさつ・曜日・日付・ 天気) 英語でのあいさつを行い、日付と 天気を確認する。	○基本的な言い回しとつづりの確実な定着 を図るために、毎回の授業で日付等を口 頭で確認する。	3分
	2 本時のめあてを確認する。 (1) 夢の学校プロジェクトの広告と 応募要項を確認する。 (2) 本時のめあてと見通しを確認す る。	○これから行う活動内容を想起させ活動す る意欲を高めるために、単元導入で用い た広告を再度提示するとともに、新たに 英語で書かれた応募要項を提示する。 ○生徒と共にめあてを作成することで、本 時の活動内容と目標を明確にする。	5分
展 開	3. 応募要項の読み取りを行う (1) 配布された応募要項を読み、読 み取れた情報をワークシートに記 入する。 (2) 班で内容の確認を行う。	○内容理解をしやすいように、ワーク シートに沿って内容を分類していく。 ○全員が同じ程度内容を把握できるよう するために、班員で自分の読み取った内 容について発表し合い、自分が読み取れ ていなかった分はメモをとるようにす る。	10分
	(3) 全体で応募要項の内容の確認を 行う。	○全体で理解の程度を統一させるために、 スクリーンで応募要項の内容を提示す る。	4分
	4. 応募要項に沿って英作文を行う。	○次回班活動をする際に、自分の作ったき まりを2文、班でつくる学校のきまりに 取り入れるために、個人で4文応募要項 に沿った学校のきまりを作らせる。 ○相手に伝わりやすい英作文を行うため に、なるべく既習の単語を活用するよう に指示する。	20分
		評価B 応募要項の条件を満たして、夢の学校のきま りを4文作成できている。 ◇応募要項に記載された必須事項を満たし て、計画を立てられている。	
ま と	5. 本時のまとめ	○have to や助動詞を正しく使い分ける事 により、絶対にしなければならないこと	3分

め	や、しなくてよいことを表現できたという価値につなげるために、夢の学校のきまりを作成できたことを賞賛する。
have to や助動詞を正しく理解していれば、応募要件を満たした夢の学校のきまりを作成することができる。	

8 研究のまとめ

(1) 4技能についての意識調査の事前・事後の比較

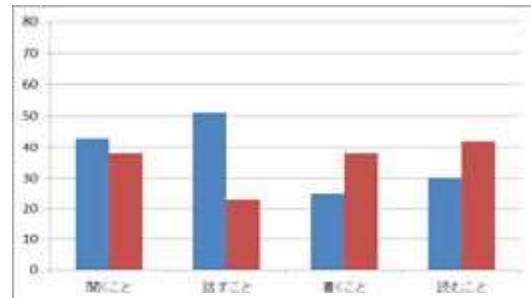
実証授業を行う前後に行った英語科の4技能についてのアンケート結果を比較した。(グラフの左側が事前、右側が事後、結果はすべて複数回答可)「技能で身に付けたい力」については、「書くこと」が25%から38%に13ポイント上昇している。「書くこと」を選んだ理由として「外国の相手にメッセージを送りたい」「大人になっても使えるから」「単語や文法が苦手だから」というのが上がっていた。本実践を通して、「書くこと」についてのよさや課題意識が高まったことでさらに身につけていきたいという意欲につながったと考える。「技能の中で苦手な分野」については、「書くこと」についてはほぼ変化が見られなかった。「書くこと」を選んだ理由として、「単語が覚えられない」「暗記することが苦手」「難しい」というのが上がっていた。今回の実践の中で、「基盤づくりの活動」に大きな課題が残った。

「技能の中で大切だと思う力」については、「書くこと」が25%から47%に22ポイント上昇している。「書くこと」を選んだ理由として、「話せなくても書けたら便利がいい」「自分が苦手だから高めていきたい」「書けるようになりたいから」というのが上がっていた。本実践を通して、

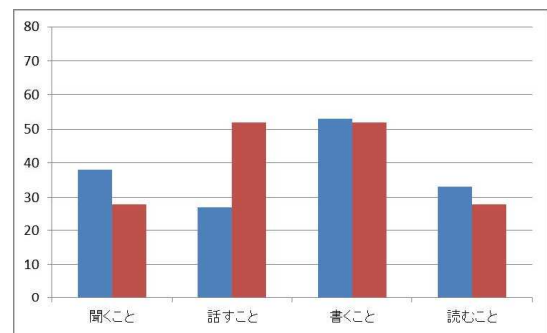
これまで意識してこなかった「書くこと」の大切さに気づいた生徒が多かったからだと考えられる。また、1回目のアンケートに比べて、大切だと思う力に複数〇をつける生徒が増えており、英語全体に対する必要性も高まったと考える。

(2) 定期テストにおける英作文の正答率の推移

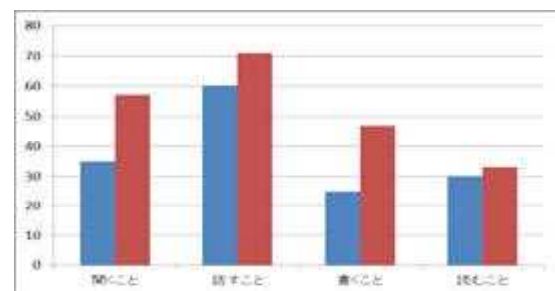
2回の定期テストにおいて、自己の思いや考えを書かせる英作文の問題を出した正答



【図4 英語の技能で身に付けたい力】



【図5 英語の技能の中で、一番苦手な分野】



【図6 英語の技能の中で大切だと思う力】

率の推移が表4である。2学期の中間テストと3学期期末テストを比較すると正答率で11.5ポイント上昇しており、自己表現力が高まったと考える。

テスト	2学期中間テスト	3学期期末テスト
正答率 (%)	55.5	67.0

8 成果と今後の課題

- 家庭学習と日頃の授業を連動させた基盤づくりの活動を行うことで、英作文のスキルの定着が図られるとともに、そのことを基に、読む活動と書く活動を連動させた単元の工夫を行えば、既習の英単語や文法事項を組み合わせ、自分の思いや考えを適切に書くことができる自己表現力を育成する上で有効である。
- 基盤づくりの活動：3分間英作文や5文英作文の継続した取組は、英作文を行うことに慣れさせ、英作文への意欲を高める上で効果的である。
- 読む活動：様々な読ませ方の工夫（ジグソー法、ピクチャードロ잉、英問英答）を行うことは、内容を深く理解することができ、英作文を行う意欲を高める上で効果的である。
- 書く活動：「マイオピニオンシート」を活用して段階的に英作文させたり、単元の最後に発表する場を設定したりすることは、自己の思いや考えを英作文する力を高めるために効果的である。
- 英作文に対する苦手意識をさらに払拭させるために、基盤づくりの活動の更なる工夫が必要である。
- 本実践をさらに他の単元に広げて実践していく必要がある。